日韓発掘交流に参加して

2015年10月５日から11月27日まで、日韓発掘交流事業により、韓国の国立慶州文化財研究所に滞在し、発掘調査に参加しました。発掘交流事業は今年で10年目の節目の年を迎えましたが、これまでにも多くの先輩達が韓国での調査に参加し、また奈良文化財研究所でも受け入れをおこなってきました。

10月は５世紀の新羅の墓域であるチョクセム古墳群の分布調査に参加しました。本年度の調査地区は戦前に朝鮮古蹟研究会が古墳を発掘調査した地区で、その古墳の正確な位置や周辺の状況の確認が主な目的でした。11月には場所を移し、統一新羅時代の東宮跡と推定される新羅王京遺跡の発掘調査に参加しました。長期にわたって発掘調査を継続してきた地区で、本年度は主に断ち割り調査による下層の状況の確認をおこないました。

どちらも膨大な量の礫石を用いた遺構が良好に残る遺跡で大変感動的でしたが、それゆえ普段経験する発掘調査とは趣が異なり大いに悩まされました。韓国の研究者と片言の韓国語で意思疎通をはかりつつ調査を進め、たどたどしいながらも、調査の方針や遺構保護の考え方、今後の活用のあり方などについて、まさに遺跡を目の前にしながら話し合うことができ、多くのことを学ぶことができました。

コスモスの盛りから紅葉を経て、最後には初雪の中キムチを漬け込む時期までの滞在となりましたが、世界遺産慶州歴史地区の折々の姿を眺めつつ、文化財の調査研究のまさに第一線で活躍する同世代と深く交流できたことは、得がたい経験となりました。今後も、奈文研と慶州文化財研究所の絆と交流がますます深まることを期待します。

（都城発掘調査部　川畑 純）

発掘調査への参加風景

デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用

遺跡整備研究室では、これまで遺跡整備の実務に携わる行政担当者・研究者等を対象とする研究集会を実施してきました。2015年度は「デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用」をテーマに、12月18日に開催し、参加者は117名でした。

近年、遺跡現地での理解促進を目的とする、デジタルコンテンツの導入が盛んになってきました。特に、スマートフォン等のカメラを通じて映し出された遺跡現地の映像に、CGで作成した復元建物等を重ねて映す技術を、AR（＝Augmented Reality：拡張現実感）技術といい、注目されています。この技術を用いれば、遺跡に復元建物等の整備をおこなっていない場合でも、来訪者が遺跡のかつての景観を追体験することが可能となります。また、ご当地キャラを映し出して共に記念写真が撮れる等の遊びの機能をもたせることで、身近に歴史を学ぶ仕掛けとする等、観光振興の側面での効果も期待されています。いっぽう、これらのシステムの更新・維持管理をはじめ、課題も多く、これらの技術開発の最前線、全国の現状、問題点の共有を目的に研究集会を実施しました。

研究集会では、「バーチャル飛鳥京プロジェクト」等に取り組む東京大学生産技術研究所の大石岳史先生のほか、既にシステムを導入した地方公共団体の担当者２名、アプリ開発の最前線に立つ開発技術者２名にご報告いただきました。また、平城宮跡第二次大極殿跡等で、AR技術を用いたアプリのデモを実施し、参加者に好評を得ました。

今後も遺跡整備研究室では、遺跡の現場で必要とされる調査研究を続けていきます。

（文化遺産部　高橋 知奈津）

平城宮跡第二次大極殿跡でのデモの様子